

－学術フォーラム 日本の将来図Ⅱ－
人類学者、心理学者、科学番組ディレクターが
提案する日本の子育て問題解決法
開催レポート

日程：2016年12月18日（日）
於：八芳園



学術フォーラム・日本の将来図Ⅱ

人類学者・心理学者・
科学番組ディレクター
が提案する、日本の
子育て問題解決法

THE
FUTURE
OF
JAPAN

2016年12月18日（日）13:00～17:30
八芳園 東京都港区白金台1-1-1

日本の未来を語る。

次代の
創造工房

開催概要

ー学術フォーラム 日本の将来図Ⅱー

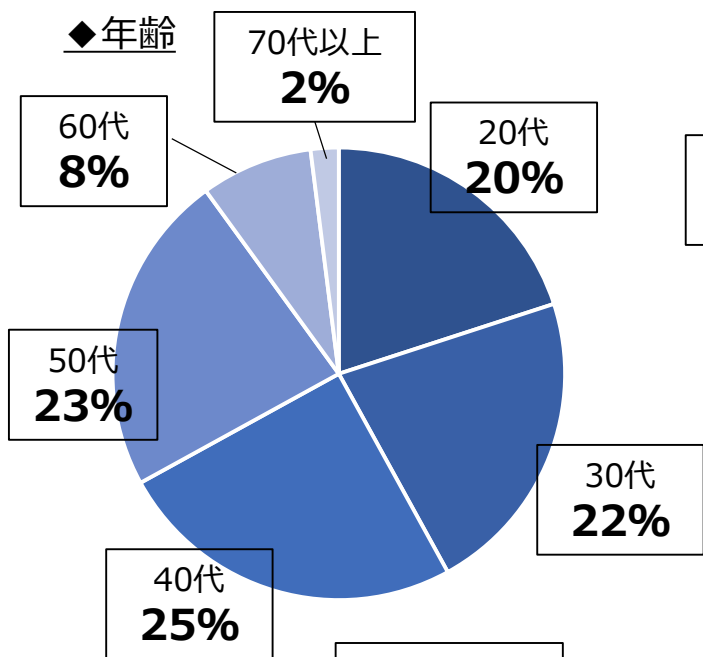
人類学者、心理学者、科学番組ディレクターが提案する日本の子育て問題解決法

日時 : 2016年12月18日(日) 13:00~17:30
会場 : 八芳園
主催 : 特定非営利活動法人 次代の創造工房
共催 : 八芳園
特別協賛 : 株式会社伊藤園、グリーンコア株式会社
協賛 : 株式会社小糸製作所、日本フィジカルアコースティクス株式会社、mamagirl
後援 : 厚生労働省
協力 : アゼリーグループ、ヒーローズエデュテイメント株式会社、Support Our Kids実行委員会
司会 : 湯山 茂徳氏(京都大学経営管理大学特命教授/学術フォーラム実行委員長)
登壇者 : 長谷川 眞理子氏(総合研究大学院大学 理事)
明和 政子氏(京都大学大学院教育学研究科 教授)
兼子 将敏氏(NHK 科学・環境番組部 チーフディレクター)

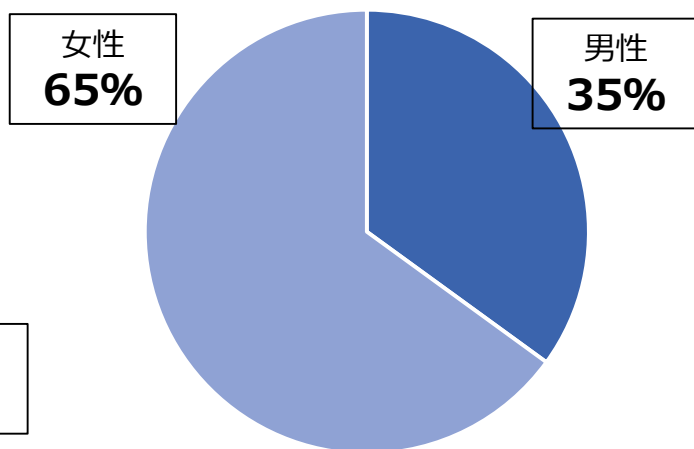
ご来場者数 : 70名

参加者アンケート

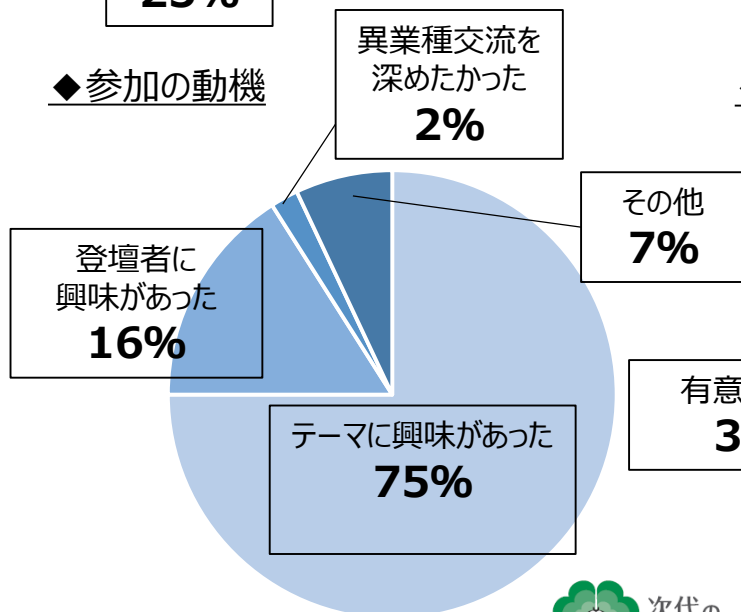
◆年齢



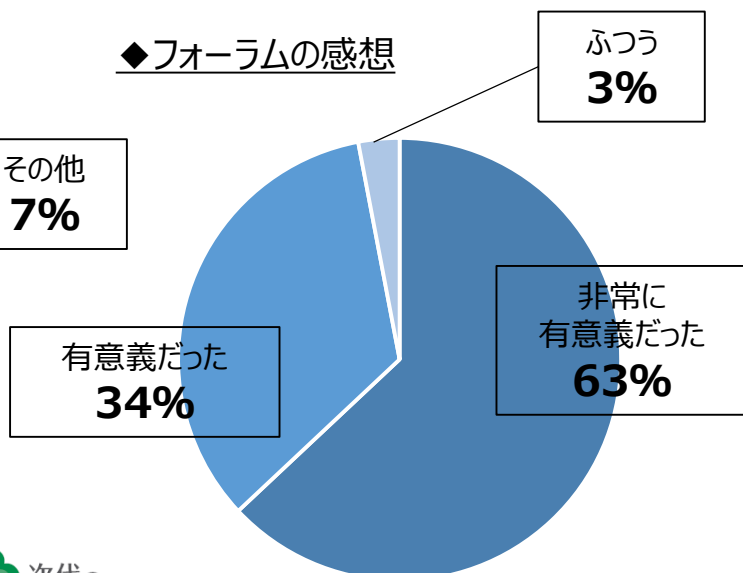
◆性別



◆参加の動機



◆フォーラムの感想



1.オープニング

湯山 茂徳氏

- ・子供たち（日本の未来）を取り巻く環境が大きく変化している。

例えば2016年度の成人式対象人口はおよそ126万人であったが、団塊の世代（1947年～1949年生まれ）の3年間の合計出生数は806万人であり、1年あたりの平均出生数は、270万人近くを数えていた。一方、2016年の新生児出生数はおよそ98万人とされ、100万人を切るまでに減少している。



- ・少子超高齢化社会という時代の曲がり角を、どう乗り越えたらよいのだろうか



- ・本年5月、専門分野の垣根を越え、学者たちが集結して、横断的かつ総合的な討論会を実施した。

→現在、核家族化の急速な進行により、血縁、地縁による支援を失った多くの母親たちが、社会的・公共的な支援を十分に受けることもできないまま、誰の助けも借りられず、一人で子育てを行わなければならないという状況に追い込まれ、悩み苦しんでいる。深刻化するこうした日本の子育て問題をいかに解決すべきか、日本を代表する子育て問題のエキスパートが一堂に集結し、実際の問題を明らかにし、一緒に解決法を考えていきたい。

2-1.講演

★長谷川 眞理子氏「人類進化史から見た子育て：ヒトは共同繁殖の動物」

- ・自然人類学、進化生物学から、ヒトはどんな動物なのかを理解して在り方を考える。

- ・ヒトは大きな脳で何をするのか → 「社会生活」

他人の心を読んで何を考えているかを理解し、自分が何を考えているかを理解し、一緒に心を共有しあって何かをする。それが社会的な脳を形成し、社会的な活動となる。

- ・動物としてのヒトとチンパンジーの決定的な違い

①生活史の変化（子どもと老人の出現）

②一人の親が一人育てるのではなく、互いに協力して育てることにした

→ 相互扶助（社会・組織の構成員同士が互いに助け合うこと）社会の形成

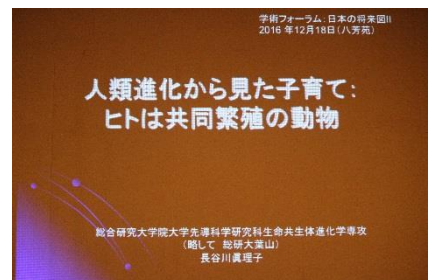
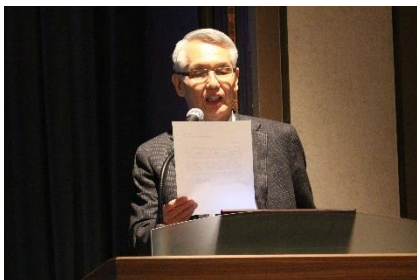
- ・猿類は、母親が一人で育てるが、ヒトは、周囲の協力を得て一緒に育てる。

- ・現代社会では、本来、共同繁殖であるヒトの子育てが見えにくくなっている。

原因：貨幣経済・都市生活・職住分離・学校教育・個人主義

→協力し合ってコミュニティで暮らしている意識が希薄に。

- ・人類学的な提言としては、「働くお母さんのために保育所を」ではなく、ヒトの相互扶助、共同繁殖を土台とした社会づくりを主張！



2-2.講演

★明和 政子氏「ヒトの子育てを支える心の動き」～その発達と生物学的基礎～

- ・「ヒトの心の成り立ち」を科学的に明らかにする。（チンパンジーとヒトとの比較研究を実施）
- ・飼育下のチンパンジーの二例に一例が出産時にパニックを起こし、養育を拒否。
- ・野生チンパンジーは、「母親が一人で産み、一人で養育が原則。」
- ・ヒトは「共同教育」の形成を獲得して進化してきた生物。
→他者と養育するヒト、複数の幼い子どもの面倒を同時に見る現代の母親
- ・他者の心を理解する2大神経ネットワーク
 - ①ミラーニューロンシステム：他者と自己を区別しない神経細胞。自分の行為＝他者の行為。
 - ②メンタライジングシステム：他者の心的状態を見出したり推論したりするシステム。
- ・ヒト特有の養育環境→ミラーニューロンとメンタライジングをうまく使い分け教育する。
※チンパンジーは、メンタライジングシステムの機能が弱く、基本的に教育することが少ない。
- ・メンタライジングシステムが機能していない親御さんは、様々な問題が起きる。
→相手（子ども）の立場を推論するのが難しい。
- ・子育てでは、「子も親も育つ」。養育経験が親に特有の脳の働き方を形づくる。
- ・「科学的根拠に基づく」正しい子育ての理解を！！

★兼子 将敏氏「NHKスペシャル『ママたちが非常事態!? 1および2』制作の背景と反響」

- ・番組制作のきっかけ：2児の母親である小林ディレクター（NHK）。
→子育てが辛い。科学で解き明かせないか。
- ・子育てで「7割」の母親が孤独感を感じている。
- ・アフリカ、カメルーンでの取材：「自分の子も他人の子も同じ家族」「みんなで育てればいい」
→本来のヒトの子育て「共同養育」
- ・「共同養育」により母親に備わった仕組み：エストロゲン（胎児を育むための女性ホルモン）。
そのエストロゲンが出産とともにゼロに近くなるほど低下し、不安や孤独感が生まれる。
- ・子どものイヤイヤ行動：前頭前野の欲求抑制機能。最も発達が遅い部分。
仕組みのために起きているもので、子どものわがままではない。
知ってもらうことで母親が楽になる、周りの目も変わるのではないか。
- ・世の中のお母さんに向けたメッセージ：
「子育てがつらいのはお母さんのせいじゃない。つらいと言って良い。誰かに子育てを任せて良い。」



3. パネルディスカッション

□テーマ①：「少子化、子育て問題」

長谷川 真理子氏

- ・働くお母さんを助けるのではなく、人間は「共同養育」システムがなくてはならないという考えからシステム・仕組みづくりが必要。

明和 政子氏

- ・生物としてふさわしい社会システムを作るしかない。一番良いのは、幼稚園や保育園が「共同養育」の場として機能していくこと。親を含めて、保育園、幼稚園で「親性」を育てる場所を地域で作っていく。

兼子 将敏氏

- ・取材した中で、おじいちゃんおばあちゃんに母親が子どもを自由に預けられるNPOがあった。大学で女子大生が子育てを体験するサークルもある。昔のシステムを蘇らせるのではなく、現代の環境にあった「共同養育」をいろいろな階層、コミュニティ、国の制度で努力を積み重ね作っていければ良い。

□テーマ②：「家族の共同作業としての子育て」

長谷川 真理子氏

- ・母親が子どもを育てるネットワークをどれだけ持っているかで父親の役割が変わる。母親は出産があり子どもから逃げられないが、男は妊娠がわかったら逃げるという選択肢が常にある。物理的に子どもと離れられるか、離れられないかが大きな違い。

明和 政子氏

- ・オキシトシン（幸せホルモン、愛情ホルモンとも呼ばれ、ストレスを緩和し幸せな気分をもたらすホルモン）の相関：母のオキシトシンの濃度が高いと、お父さん、お子さんのオキシトシンも高い。
- ・オキシトシンは特別なことをしなくても、目を見る、触るだけでも出る。日本の夫婦はハグやタッチングは少ないかもしれない。効果的に使っていくのも良いのではないか。

兼子 将敏氏

- ・男性は母親の苦労を理解する、言葉として伝えることが重要。理解、気遣いは、イクメンの第一歩。

□テーマ③：「社会的共創作業としての子育て」

長谷川 真理子氏

- ・本当の個人主義、個人の人権ではなく、家庭、家族が単位なのに近代化が起こると、家族の支えが物理的にできなくなってきた。トラスティック（思い切った）にシステムを変更することで解決を。

明和 政子氏

- ・子育ては、知的な営み。前頭葉。常にイメージ力、メンタライジングを働かせないといけない。

□テーマ④：「子育て問題の社会への発信と受信」

明和 政子氏

- ・一番大事なものは、研究者も現場の声を聞くこと。ダイレクトに聞き、テーマを決め研究する。それをメディアを通して発信する。

4. 質疑応答

□参加者①（女性）：「子育てに悩むママたちに贈る言葉とは？」

長谷川 眞理子氏

・みんなで育てなきゃいけない、母親や家族としての責任ではなく、社会の責任として認識しましょう。

明和 政子氏

・わかってても完全に解決するわけではないから、一緒に考えましょう。

兼子 将敏氏

・お母さん、子育てが辛いのは、あなたのせいではありません。

□参加者②（男性）：「アメリカの社会的システムは？」

長谷川 眞理子氏

・「援助して」と言える環境は、子どもに幸せを与える。夫への信頼も、子どもの幸せにつながる。
・日本には、援助を求めてはいけないという文化的プレッシャーがある。

明和 政子氏

・こうでなければならないというものがない。文化的価値観がある。

兼子 将敏氏

・父の育児参加も、ベビーシッター利用率も高い。
・子育ては母が背負い込む仕事ではないという意識がある。

□参加者③（女性）：「保育所は、特に若いお母さんに対し、何を伝えたら良いか。」

長谷川 眞理子氏

・ある種の思い込み、完璧主義、脅迫感をなくしたら良い。もっと気楽に、たまには転んでもしょうがない。
・子育てを楽しめるように、絶対、完璧にするとキツキツに縛りすぎてはいけない。

明和 政子氏

・若いお母さんが辛いのは当たり前。多様な経験をした人がいること、
そこを学習の場所として機能していくべき。その上で、心の問題を支える必要がある。

兼子 将敏氏

・頑張る人ほど苦しい。気楽になればよい。
・辛いと言っていい、背負いこまなくていい、フォローする人間関係があると苦しみが解決する。

5. パネルディスカッション、質疑応答の様子



6.参加者の主なコメント

- ・自然界における“ヒト”の話からチンパンジーの出産、ヒトの出産の話、現代の子育ての話と、順を追って学べたので、とても参考になりました。子育ての現状をそまの生物学や脳科学で勉強できると育児本よりも説得力があり納得できました。（30代 男性）
- ・子育てに対して、今まで社会的には科学的なアプローチが少なかったような気がします。本企画は、そうした流れに切り込む歴史的にも尊い企画と思いました。（40代 男性）
- ・子育ての問題が人ごとではない、自分の行動としてどう取り組むのか、日本の子育てシステムの問題が分かりました。（60代 男性）
- ・学術フォーラムに参加しなければ、知ることができなかった、人類学的なところ、科学的なところから見た、ヒトについてやヒトの成長、子育てについて学ぶことができ、本当に勉強になりました。あまり気負わず、少し力を抜いて子育てしていければ良いと思います。（20代 女性）
- ・「ヒト」と「チンパンジー」という、人類学的なことを通して、今の社会の問題がつながっているということを改めて感じました。「共同繁殖」、共に生きていくことの大切さをもっと一人ひとりが自覚し、ネットワークが広がっていくことで、日本の子育ても良くなっていくのではと思いました。被虐児がこれ以上増えない日本、幸せな家族、子ども達の笑顔あふれる日本、そして世界を祈っています。（30代 女性）
- ・乳幼児期に携わる立場にあり、保護者支援の重要性を特に感じていたので、母も父も苦しい状況にあることを踏まえて、幼稚園や保育園は今、何をしてあげられるか、何をすべきかを考えていきたい。今回、たくさんのヒントを頂けたことに感謝いたします。（30代 女性）
- ・社会的な変革はなかなかすぐには難しいことだと思いますが、まず科学的な事実を理解し、その認知を広げることで、気持ちを変えていくことはできるのかなと思いました。（40代 女性）
- ・今回も興味深いお話を伺いました。一言ひとことが染み入ってくる珍しい講演会であると感じました。同じテーマを重ねて深めていく機会をお願いいたします。（40代 女性）
- ・現在、保育園で働く職員として新たな責務が見えた今回の学術フォーラムでした。今後、何らかの形で社会のために役立たせたいと感じました。（40代 女性）